総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

豊島正典

1 総名妙法蓮華経について
2 一念三千の出処について
3 内鑑と外宜の一念三千について
4 三千法相の構成について
5 台当に於ける十界の見解について
6 三千法相の意義について
7 体外三千と体内三千の異目について
8 一念三千の能所総別について
9 総名妙法蓮華経と別体事具三千の同異について
10 妙法は能裏、三千は所裏の関係について

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

一　総名妙法蓮華経について

総名妙法蓮華経と一念三千の関係は能所総別の関係、即ち総名妙法蓮華経は能生、能摂、能開の徳を持ている故に総持、総在、総名、総体と言うのであります。即ち能生とは能開、能摂の徳を摂めたもので、能開とは総名妙法蓮華経より迹中諸経、諸仏菩薩諸土を従一出多することであり能摂とは総名妙法蓮華経に迹中諸経、諸仏菩薩、諸土を摂めたもの即ち従多帰一したものであります。総名、総在、総体というのは能生の徳を持った根本であり、別体を総している故にかくいうのであり、能生は堅の関係を意味し冥合は横の関係を意味するものでこの堅横の関係を綜合するものが、総名、総持、総在、総体なのであります。

一念三千はだから所生・所開・所摂・別体の関係にあると申せます。

この総名妙法蓮華経は如何なる経典に説かれているかと申しますと、それは言う迄もなく本地総体門たる本門八品に説れているのであり、このことを本尊抄（縮九四〇）略明の段に

迹門十四品未レ説レ之於二法華経内一時機未熟故歟。此本門肝心於二南無妙法蓮華経五字一仏猶文殊薬王等不レ付二属之一何況其已下乎。但召二地涌千界一説二八品一付二属之一。……如レ是本尊在世五十余年無レ之八年之間但限二八品一。

と妙判されてあります。

即ちこの御妙判について門祖日隆聖人の御科文により拝見すれば、先づ、

総じて滅後総付流通意別に約して本門上行別付の南無妙法蓮華経の本尊の正躰を宣ぶ。

と御科文ありこの文分れて二となるのであります。

初に結前生後、結前は破を論じ、生後は立を用ふ

とあり、次に

末法相応の本門の本尊を立つることを明す

とあり、これが分れて二となり、初に

能付の人並に本尊の立所を明す

と御科文あり総名妙法蓮華経の立所を明され、更にこれを結ばれて、御科文に、

末法相応の本門の本尊を結成す。と御科文あります。

これを述ぶれば、初に

総じて滅後総付流通意別に約して、本門上行別付の南無妙法蓮華経の本尊の正体を宣ぶ

と御科文あるのは、

総付滅後とは、神力品の付属の教義によるものにして、本地本門法華経によれば久遠報身本仏が、弟子上行菩薩に滅後の弘通を付属する時、経文に「爾時仏告上行等菩薩大衆」とありて本仏滅後の正像末三時の弘通を上行菩薩に総じて付属されたのを総付滅後となし、

流通意別とは、嘱累付属の教義によるもので、重ねて本化迹化等に滅後正像末の弘通を付属する時、正法の弘通を迦葉、阿難等に付し、像法の弘通を迹化の菩薩に付し、末法の弘通を本化の菩薩に付属されたものでこれを流通意別というのであります。

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

今本門の本尊総名南無妙法蓮華経は滅後末法下種の本尊なる故に別して下種の導師たる上行菩薩に付属するという義によつて本尊の正体を顕わされたのであります。

次に御科文に

結前生後、結前は破を論じ、生後は立を用ふ

とあるのは、御妙判に

迹門十四品未説之於法華経内一時機未熟故歟。

とあるに対して科文せられたものであつて、結前は破を論じ、生後は立を用ふとあるのは、迹中在世五十余年の諸経を破して本地を顕わし、別して本地の中にありては一品二半の本地の脱理を破して、生後の本門の肝心南無妙法蓮華経を用立せられたのであり、迹門十四品には未だこれを説かずとあるのは迹中在世五十余年の経々にはこの本門の肝心たる南無妙法蓮華経を説かれてないという意味であります。

故に結前とは四十五字の一念三千を明せる文を結びて迹中十四品（迹中諸経）に未だこれを説かず、時機未熟の故なる歟、と四十五字を結ばれたのであり、生後とは此の本門の肝心南無妙法蓮華経等と生後したのであります。

而して結前は破を論ずる故に本地別体門の本脱一品二半を以て迹中の諸経を破して、（一品二半前立法門）本地総体門の種子下種の南無妙法蓮華経を顕わして付属する本門八品を顕わされるのでありますが、この本脱一品二半を総体門の本地本門八品体内の正宗寿量品の種子によつて破して、はじめて下種の本尊南無妙法蓮華経があらわれるのであります。

本文（本尊抄）にある迹門十四品とは、次下の説八品に対するものであり、此の八品は本地本門八品にして迹中の

八品ではないのであります。故に本地八品に相対される迹門十四品でありますからこの迹門というのは当然迹中の諸経に対するものであります。

又本文の今本時娑婆……三種世間是也。とある本地別体門の本脱一品二半に対するも、迹門十四品にこれを説かずとあるのは迹中諸経を総括して迹門十四品に収めて迹門十四品とせられたのであります。若し迹門十四品とあるのは本門十四品に対するものとすれば、後の本文に在る在世五十余年にこれなし但限八品の文に相応しなくなるのであります。故に迹門十四品とは前述の如く迹中の諸経を迹門十四品に収めて迹中諸経の意を以てて迹門十四品と仰せられたのであります。

迹門十四品に未だ之を説かずとある、之の一字は結前の文に対すれば四十五字の一念三千の法体を指すものであり、生後の文に対すれば、本門肝心南無妙法蓮華経を指すものであります。一念三千の法体たる本地一品二半の本脱、即ち本因果国三妙合論の理事の一念三千と、本地総体門の本地本門八品の肝心南無妙法蓮華経と相望して本地の総別を明確にする為、御科文は、迹門十四品未説之等の文を結前生後と科文せられたのであります。

若し破顕に約すれば、迹門十四品未説之と迹中諸経を破し、生後の本門の肝心南無妙法蓮華経を顕すものであり、随て法華経の中に於てもとある法華経は本地本門総体門の法華経であります。

次に末法相応の本門の本尊を立つることを明す。と科せられ、これが分れて、

能付の人並に本尊の立所を明す。

と科文せられてゐますが、その本文は、

此本門肝心於二南無妙法蓮華経五字一仏猶文殊薬王等不レ付二属之一。何況其已下乎。但召二地涌千界一説二

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

八品一付三属（シタマフ）之。

此の本門の肝心……之を付属す。

とあるのは能付の人を示すと同時に本尊の立処を明されたのであり、別して仏とは能付の人、猶文殊等は所付の人にして、その所付の人に就て、猶文殊……付属し玉はず如何に況や其の已下をやの、文は迹化を簡捨し、但召地涌等の文は本化を簡取することであり、説八品の文は本尊南無妙法蓮華経の立処を明されたのであり、説八品付属之の文は八品付属を明されたのであり、但召地涌付属等の文は上行付属を明されたのであります。

本文の此の本門の肝心とは本地八品の総要を肝心と云ひ、南無妙法蓮華経は上行付属の南無妙法蓮華経で、本門の肝心南無妙法蓮華経は下種の本尊である故に八品付属・上行付属がなければ下種とならない故に説八品と但召地涌付属之とありて本尊総名南無妙法蓮華経の立処（アリドコロ）が分明となるのであり、別して委しくいえば、説八品は本尊の立処であり、八品付属が又本尊の立処であり、上行付属が本尊の立処であります。故に本尊のアリドコロは説八品、八品付属、上行付属の三者一体をなして下種の本尊総名南無妙法蓮華経が示されるのであり、経文に就ていえば本地本門八品は本尊総名南無妙法蓮華経の立処であり、八品付属であり、上行付属であります。故にこの本文には、

一には本門の本尊総名南無妙法蓮華経を付属する義と、

二は本門の本尊総名南無妙法蓮華経を顕わす立処の義の二義を含めて御科文に能付の人並びに本尊の立処を明すと科せられたのであり、若し一の義をもつて言えば本地本門法華経の本尊総名南無妙法蓮華経は本地本門の肝心南無妙法蓮華経の本尊であるから迹中迹化の文殊普賢等に付属することは出来ない。況んやそれ已下の二乗人天等に付属す

ることはない故に本地久遠の報身本仏は迹化を簡捨して但だ地涌千界の本化を召し出して本門八品を説て（八品付属）本化上行菩薩に本門の本尊たる総名妙法蓮華経を付属せられた（上行付属）のであります。

二の義をとりますと、本地本門の肝心南無妙法蓮華経の本尊はもとより本地本門法華経（本地総体門の本地八品）の本尊であるから迹中の諸経に説き顕わされる筈はない、随つて迹化の文殊薬王等に付属される筈はなく、況や其已下はいう迄もない故に迹化を簡捨して但地涌千界を召して本地本門八品を説きて（本尊の立処）上行菩薩に付属されたのである。と本門の本尊の立処は本地本門に限ることをあらわされたのであります。

この総名妙法蓮華経は八品にのみ説かれているということは以下の文に、

是の如き本尊は在世五十余年にこれなし、八年の間にも但八品に限る

とあるによつて一層明確となるのであります。この本文に

如レ是ノ本尊ハ在世五十余年ニシテ無レ之八年之間タ但限ルニ八品ニ

と御科文され、

末法相応の本門の本尊を結成す

とあり、

この本尊総名妙法蓮華経は上行所伝本因下種の総名妙法蓮華経本尊にして末法下種の時機に相応せる本尊総名妙法蓮華経にして、下種の本尊総名妙法蓮華経は迹中諸経に明す迹中三世十方法界の微塵の法仏身土の諸経を破迹し顕わされ本地の法仏身土を総在せる本尊妙法蓮華経であり、此の下種の本尊妙法蓮華経は本地本門八品に顕わされたものであると結成されたのであります。

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

在世五十余年に之れ無しの文は本地を顕わし八年の間の文は説法の八年を指し、但限八品に限るの文は本地本門法華経は本地本門八品であることを顕し、又本地下種の本門の本尊総名妙法蓮華経は八品に顕われ玉うことを示されたのであります。

是の如き本地本門八品に顕わされた本地本門下種事行の本尊総名妙法蓮華経は迹中今日（在世）一代諸経乃至三世十方法界微塵の迹中の法仏身土の諸経即ち仏在世の五十余年の教時にこれなく此等の迹中の法仏身土の諸経を破して顕わされた本地本門八品（本地本門法華経）にのみ顕説されたのであります。

即ち本地久遠の本仏が本仏自身の自行の下種を顕わすと同時に滅後末法（本地久遠の末法）の一切衆生の為に説かれた（滅後本地本門法華経）本地の八年の説法である法華経の中にも但本地本門法華経八品に限ると妙判せられたのであります。

是の如く迹中の在世五十余年の法華経乃至迹中諸仏所説の経教に於ては本地本尊総名妙法蓮華経はこれなき故に在世五十余年にこれなしと判じ玉うたのであります。八ヵ年の間にも但八品に限るとは本地一代の所説の法華経の説法の中に於ても本地本門八品に限て顕われ玉う本尊総名妙法蓮華経であると顕示されたのであり、本地一代の説法とは本地在世の八ヵ年の説法であり、此の本地在世の八年の説法は滅後末法の為に説かれたのであります。此の八ヵ年の説法の法華経は本地本門八品体内の一部八ヵ年の説法であり、体内の一部の迹門には三千塵点を明し本門には五百塵点を明されたのであります。これによって仏の自行の因果は本地本門八品に限るのであります。されば本因下種の本尊総名妙法蓮華経は八ヵ年間但八品に限ると判じられたのであります。

故に宗祖大士は第三の法門なり五味主の法門なりと仰せられたのであります。是の如く今日一代五十余年の説法並

に三世十方諸仏の経教を第三教相の立場から本地と迹中の二経に分別して迹中諸経を破廃して本地本門法華経八品を顕わして下種の本尊、総名妙法蓮華経を顕わされたのであります。

されば「在世五十余年に之れ無し」の判文がなければ、総名妙法蓮華経は本地の本尊であること明にならず、「但限八品」の判文がなければ本地本門下種の本尊たる総名妙法蓮華経が明にならないのであります。

この故に本地本門八品の意は宗祖大士が本尊抄に於て示された第三の法門であり、五味主の法門であつて日隆聖人の所説ではないこと本尊抄の文に依ても分明であり、本尊たる総名妙法蓮華経の立処は本門八品に説き顕わされてあること解るのであります。

次に一念三千について述べると、一念三千の教義は天台及び当宗に於ける観心門の最高教義であり天台宗の宗旨であり、天台大師の己心所行の法門にして大師の安心の境界を説かれたものであります。それ故に一念三千の法門は理解や説明によつて知り得るものでなく実際の修行によつて体得せられるものであります。当家の一念三千に関しても同様に但だ修行によつて与えられた体得せられるので、言説によつて達し得る処のものではないのであります。然してこれは一念三千を宗旨として見た場合であり、若しこれを教義として考察するならば理解し、説明されうるのであります。故に一念三千を教義として見るなれば、これは天台大師の独創にして、法華経の十如実相の教理に基づき全仏教に於ける教理を綜合して宇宙観及び人生観を組織せられたものが即ち一念三千の教義であります。

二　一念三千の出処について

天台大師の一念三千は己心所行の法門なるも摩訶止観によつて釈出せられたものであります。即ち摩訶止観第五巻

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

第七正観章に至りて釈出せられたもので、これを詳述すれば止観一部は十章に分れ、十章にわたりて観法を明されたのであります。この十章に亘る観法によつて一念三千の法理を証て我身に其の法理を体得するのであり、此の十章の観法は前六章と第七章以下の二段に分れ、前六章を妙行と名づけ、一念三千を観ずる準備とし所謂二十五方便に経て一心三観の智を練行するのであります。この一心三観の智を躰得して此の妙行に依て妙智を得、此の妙智を以て一念三千の法を観ずるを正観といひ、第七章に至つて始めて一心三観の智を以て一念三千の観法を修するから第七章を正観章と名づけ第七章に至つて一念三千の観法が明されたのであります。この故に第七正観章に至つて一念三千の法理を観ずる方法として十境、十乗の観法が明されその観法は十乗観法と十境観法の境智の二類となり、十乗観法の主体は第一の観不思議境であり、十境観法の主体は第一の陰入境で、この二つの観法の主体を体観とし、その他は皆、用観とするのであります。而してこの十乗観法の体観である観不思議境が分れて、理境、修境、化他境の三境となりこの三境の中理境より釈出せられたのであります。

然してこの正観章に明されたる一念三千は本経に於ては如何なる経文に基づきて天台大師が釈出せられたかという問題に対しては天台宗の学者の論はまちまちで、或は天台大師の独悟にして法華経に由らずといひ、或は法華経迹門方便品の十如実相の文なりといひ、或は法華経本門寿量品といひ区々でありますが、

宗祖大聖人は立正観抄（縮一〇六五）

問天台大師止観一部竝一念三千一心三観已心証得ノ妙観併依ニ法華経ニ云証拠如何。答予反詰云不レ依ニ法華経ニ見証文如何。人出レ之云此之止観天台智者説ニ己心中所行ノ法門ヲ或又故至ニ止観ニ正明ニ観法ヲ故序ノ中ニ云ニ説己心中所行法門ト良有レ以也文。難云此文全不レ依ニ法華経ニ云文非既説己心中所行ノ法門ト

云フカ故也。天台ノ所行ノ法門ハ法華経ナルカニ故ニ此意ハ依ニ法華経一見エタル証文也。

と仰せられ、更に一念三千の出処を示して、十章抄（縮六七五）に

止観に十章あり大意、釈名、体相、摂法、偏円、方便、正観、果報、起教、旨帰なり。前六重ハ依ニ修多羅一ニと申て大意より方便までの六重は先四巻に限る。これは妙解迹門の心をのべたり。今依ニ妙解一以テ立ニ正行一ヲと申すは第七の正観十境十乗の観法本門の心なり。一念三千此よりはじまる。一念三千と申スは事は迹門にすらなを許されず何況ヤ爾前に分たへ（絶）たる事なり。一念三千の出処は略開三之十如実相なれども義分は本門に限ル。爾前は迹門の依義判文迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限るべし。

と仰せられているのであります。

これらの祖判によれば天台止観の一念三千の出処は本門にあることを知るのであります。

更に立正観抄（縮一〇六八）

天台大師ハ霊山ノ聴衆トメ雖レ宣ニ五フト如来出世ノ本懐一時不レ至ルカ故ニ妙法ノ名字ヲ替エテ号ニ止観一ト。迹化ノ衆ナルカ故ニ本化ノ付属ヲ不ニ弘メ給ヘ一。正直ノ妙法ヲ止観ト説キまぎらかす故に有のままの不ニ妙法ナラ一帯権ノ法ニ似タリ。

と仰せられています。これらの祖判によつて考えるに一往迹門により再往は迹中の本門により、再三の真実義は本地本門によるのであります。然し天台は迹化の付属を受けたる故に外宣の時は迹化の衆なる故に、正直の妙法を止観と説きまぎらかすと判ぜられ、これは帯権の法なりと天台外宣の一念三千を破して直ちに天台の内証を明して天台は迹化の衆なるが故に本化の付属を弘め給わずと判ぜられたのであります。

而して天台大師迹化として弘め給う外宣の一念三千に関しては、天台の己証は天台御思慮の及ぶ所の法門なり、迹

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

門界如三千の法門は迹門の仏が当分究竟の辺を説けるなりとあり、而して内鑒の一念三千に就ては、此の妙法は諸仏の師なり経文の如くは久遠実成妙覚果満の境界にして爾前迹門の諸仏菩薩の境界に非ずと判じられています。是れ則ち天台の内証にして迹中本門一品二半の実相の上に立てる一念三千であります。故に是れは未だ真実の内鑒の一念三千でなく、次の文に真実の内鑒同致の一念三千を明して、　（立正観抄　縮一〇七〇）

本地難思ノ境智妙法ヲハ迹仏等ノ思慮ニ不レ及ハ何況ヤ菩薩凡夫ヲ乎。

とあり、是れは再往真実内証たる本地本門の上に立てられたる一念三千であります。

外宣は天台大師が迹化として如来より付属せられたる迹門の法門を弘るをいうのであり、内鑒とは天台大師本化の一類として霊山にありて本化大士に付属せられたる本地本門の妙法を聴聞して深く内心に秘するをいうのであります。而して止観の一念三千は正しく本門を以て出処と為すことを明して十章抄に　（縮六七五、取意）

前六重ハ依ル三修多羅一ニ と申して大意より方便に至る六重は迹門の意を述ぶ。今妙解によりて妙行を立つと申して第七正観の十境十乗の観法は本門の心なり、一念三千はこれより始まる

と仰せられてあり、開目抄　（縮七五一）

一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。竜樹天親知てしかもいまだひろいいださず但我が天台智者のみこれをいだけり。

と仰せられ、天台大師外宣の一念三千は本門寿量品の六句知見の実相の文に依ることを判ぜられたのであります。然るに諸門派にはこの権実相対の文を以て文底祕沈の説を立て文底寿量と称して寿量文底の一念三千こそ宗祖大士内証極祕の事の一念三千なりとの謬解を出すに至つたのであります。即ち開目抄の文底祕沈の一念三千を以て宗祖大士の

本意内証の一念三千なりと珍重するのでありますが、今其の文底祕沈の一念三千の惑説を破するならば、開目抄に明らかに文底祕沈の一念三千は天台の一念三千なることを説いて

竜樹天親知りて拾ひ出さず、但我が天台智者のみ之を懐けり。

と断定せられてある故に寿量品の文底とは竜樹天親天台等の迹化の御思慮に及ぶ範囲に於ける寿量品の文底にして、本化大士所見の寿量品ではなく、又文底にもあらざることを知るべきで、若し天台等迹化の所知に於ける寿量品の文底とは所謂一経三段門の上に立つる迹本二門にして即ち迹中の本門寿量品でありその文底にして、是れ則ち迹門に約して実相を顕わし本門に約して実相を顕わす処の実相を指して文底と仰せられたものであります。

而して迹門の実相は爾前諸経に通し本門の実相は爾前諸経の権教に通ぜず、実教たる迹門本門に通ずるのであります。それ故に権大乗の付属を受けたる竜樹天親等は既に迹門の実相を釈出せられたけれども本門の実相はその付属なき故に知つて而もこれを釈出せず、迹門の付属を受けたる天台大師は迹中本門寿量品の文底たる本門実相の妙理を釈出して迹門の実相を根底として心中にこれをいだかれたのであります。故に但我天台智者のみこれをいだくと判ぜられたのであります。

従つて天台止観一念三千の出処は三義となるのであります。即ち表解すれば

(1) 迹門＝略開三＝十如実相＝方便品＝迹地

(2) 本門＝広開顕＝六句実相＝寿量品＝迹地

(3) 本門＝本地本門＝本因本界＝実相本門八品＝本地
　　八品体内

となるのであります。

三　内鑒と外宜の一念三千について

天台の一念三千に対して内鑒と外宜の二義を立てることは当家の通談でありますが、この内鑒外宜を立てるについて総別の二意があり、総じて内外を判ずれば表解の(1)(2)は天台の外宜の一念三千であり、(3)は内鑒の一念三千で、別論すれば表解の(1)は外宜、(2)は内鑒、(3)は本化迹化同致の内鑒の一念三千であり、(2)は天台当分の内鑒内証であり、(3)は跨節の内鑒内証であります。

四　三千法相の構成について

天台大師は大小乗教に於ける諸法に対する諸種の考察たる実相観を融合統一して法華経の十如実相の教理に基き一念三千の実相観即ち宇宙人生観を創始せられたのであり、その三千法相の構成は十界、十如、三世間、三諦の四種の法相によりて構成せられたのであります。此の四種の法相の依拠は十界は華厳経により、十如は法華経、三世間は大論に、三諦の文拠は中観論によつてその名目を立てられたのであり、これらの諸教に散説せられた諸種の法相を統一して一箇の法相を構成せられたのは天台大師の法華三昧に由来せるもので、従来の記述的、説明的なる法相の見解を脱して諸法の真実相を明し、全一的な活ける法相を構成せられたのは実に法華経本門の経旨たる十界互具の教理に基づくのであります。宗祖大聖人は天台の一念三千について立正観抄に一念三千の出処は略開三の十如実相なれども義分は本門に限る云云と判ぜられてある。

天台大師が十界十如三世間三諦の四種法相を以て三千の法相を構成された理由は、弘決の五に、

十界に約せずんば事を収むること遍からず。三諦に約せずんば理を摂すること周からず。十如を語らずんば因果備らず。三世間なくば依正尽きず。

とある。

諸法を語るに十界を論じなければ諸法の自体を尽し収めることが出来ず、三諦を説かなければ、諸法の理を知らしめ顕わすことが出来ないのであり、十如因果を説かなければ諸法の生成の関係たる縁起を顕わすこと出来なく、三種世間を説かなければ諸法の相を摂尽することが出来ない故に四種法相を以て三千の法相を構成して諸法の全体を顕現して其の真相を明らかにせられたのであります。

故に十界によつて、諸法の自体は悉く収められ三諦によつて諸法の理は尽され十如によつて諸法の縁起の関係は明かに具備せられ三世間によつて諸法の現相は悉く収摂せられるのであります。

故に十界は諸法の自体にして、諸法の体であり、十界の諸法には三諦の理、十如の因果、三世間の二報の相を悉く具備され、諸法の体たる十界を外にして三諦の理を説き、十如を論じ、三世間を言ても諸法の真実相を説くものとは言えないのであります。

天台の一念三千は三諦の理を以て諸法の実体となし、十界、十如、三世間を説て三千法相を構成するのであり、当家の一念三千は十界の事を以て諸法の実体として三諦・十如・三世間を立てて三千法相を構成するのであります。

五　台当に於ける十界の見解について

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

先づ台家に於ける十界の見解は、

諸法とは三諦であり、実相は三諦である故に十界の諸法は三諦の本理より縁起せる現実の諸相であり、十界は三諦の実相より現われた諸法の相なりとなし、この三諦の本理実相より十界の諸相如何にして現われたかという生成縁起の問題に対しては業報によりて縁起せるものにして、所謂惑業によりて六道の業報が現われ、善業によりて四聖の果報が現われたのであります。即ち惑・業・苦の廻転によりて六道の諸相が不断に生成縁起し、法身・般若・解脱の廻転によつて四聖の諸相が常に生成縁起するのであるとし、無明・法性の廻転によつて十界の諸相は生成縁起しつつありと論ずるのであります。是れ即ち小乗仏教の業感縁起と大乗仏教の真如縁起を融合して十界の生成の問題に解答を与えたのであり、台家にては三諦実相の本理は常に平等一味なること譬えば海の水の如きで、若し惑業の無明起れば六道乃至九界の諸相を現じ、若し無明の惑業を断尽すれば一味平等の真如三諦の本理を現わす是れ即ち仏界であります。この故に台家にありては十界は三諦によつて現わされた起用に外ならず、三諦実相の真如によって起用せる諸法を十種の世界に分類して十界の法相を建立したものであります。

次に当家に於ける十界の見解は、

当家に於ては彼の台家に説けるが如く十界は三諦の理によつて現わされたる諸法、諸相にあらずして実は十界は諸法の本体であり、諸法の実相であり真如自体で、十界は諸法に本然と円具せる実相なのであり、当体義抄に（縮九八八）

問ノ妙法蓮華経トハ者其体何物ヤ乎。答フ十界ノ依正即妙法蓮華経之当体也。

と判ぜられ、十界の当相が即ち諸法の実相なりとすることを、諸法実相抄（縮九五八）に

実相と云ふは妙法蓮華経の異名也諸法は妙法蓮華経と云ふ事也。地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相（すがた）也。餓鬼

と変ぜば地獄の実のすがたには非ず。仏は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた。云云

と仰せられてある。当家にては十界互具を以て諸法の実体とし実相と為すのであります。

六　三千法相の意義

十界・十如・三世間・三諦の四種の法相を以て三千法相を組織する丈ではそれは諸法の体・相・性を区別した丈のことで、台家は三諦を以て諸法の体となし、十界を相となし、十如三世間を性と為す。

当家は十界を体とし三世間十如を相と為し、三諦を性とするのであります。

然して単にこれのみならば諸法を記述説明せるにすぎず、諸法の真実相の活現を明すものでないから三千法相の意義は成立しないのであります。それ故に天台では三千円具を説いて三千法相の意義をあらわされたのであるが、三千円具の根本思想たる原理は十如三諦の教理に基づく所謂円融三諦の思想で空仮中の三諦円融して法界は三諦の外に一物の存することなく皆是れ三諦にして十界・十如・三世間皆是三諦・一色一香無非中道であり、三千法相もこれ三諦の理であり、三諦円具して空即仮中であるから三千円具して三千即空即仮即中となり五陰世間にも十界・十如・三諦・三世間を具し十界も十如も三諦も乃至一塵一法、受想行等一切皆是三千法相を円具して缺減する処なし、是れ即ち諸法実相で斯く十如三諦の理を以て一切諸法を活現し来たる故に天台にては十如活法門・十界死法門といひ、要するに円具を説かざれば三千法相の意義たる諸法の活現は成立しないのであります。次に当家の三千円具は、台家は三諦の理を以て三千法相の円具を説けるに対し、十界互具本因本果の原理を以て三千法相の円具を論ずるのであり、三諦というも十界互具の因果であり、十如・三世間も十界因果の法にして、一色一香皆是十界の因果で要するに因果互具

の法理を以て三千法相の諸法の活現を明にするこれが当家の三千法相の意義であります。以上によつて一念三千の出処、外宜と内鑒の三千、一念三千法相の構成及びその意義について述べた故に今その一念三千について体内、体外の別を述べるならば、

七　体外三千と体内三千の異目について

体とは、ものと訓じ、それは真理、所詮、仏意、仏智、魂を意味するのであるが、この場合の体とは上行要付の妙法蓮華経のことであり、内・外とは妙法蓮華経の蔵に収めたる一念三千を体内の一念三千といひ、妙法蓮華経の奥蔵から外に出したるを体外の一念三千となすのであり、体外の三千は妙法五字の蔵より外の衆生の機類に示し、これを脱益の機に示して悟らしめたものであり、体内の三千は妙法五字の蔵の中（妙法五字の種子、仏種子の中に収めたもの）に収めて仏種子の一分としたものであります。故に体外の一念三千は所被の機類が証得したものであり、体内の一念三千は所証得（脱の三千）の三千を種子に収めたるもので脱の三千を種子に還した即ち以脱還種の三千であります。

体外の一念三千は天台の己証・即ち天台弘通の止観三千であり、体内の三千は上行所伝の総名の仏種子中にある体内所摂の三千であり、前者は止観によりて証得せらるるもの（在世脱益の機の証得せるもの）であり、後者は宗祖大聖人の弘められた南無妙法蓮華経の唱題によりて自然に与えられる種子の一分たる一念三千であります。

天台の止観に明す処の三千は諸法実相三諦の円を証悟したものであり、此の止観を天台外宜の止観となし、十界の本因本果の法を主体とする所謂体内所摂の三千を明す止観を天台内鑒の止観となすのであり、本尊抄（縮九二八）に

摩訶止観第五云、世間与二如是一一也開合異也夫一心……意在二於此一等云云（或本ニ云ク一界具三種ノ世間一）

と仰せになり、この文に対して門祖日隆聖人は御科文遊ばされ、

一念三千の出処を挙ぐ

と仰せられ、この文が分れて三つとなり、その一つに、

正修止観の文要を撰出す

と仰せられています。

この本尊抄の巻頭に引用せられた止観の文要は天台内鑒の一念三千であります。

天台外宜の止観の一念三千は一往は方便品の十如実相の文に依て立てられたのであるが、再往は寿量品の六句実相によつて立てられた三千で所謂天台外宜の三千は迹本二門の実相三諦の理に基づくところの実相であり、就中方便品の十如是は九界所具の実相三諦で、換言すれば二乗界所具の三諦実相の一念三千であり（これを迹因迹果の三千という）、寿量品の六句実相の三諦は仏界所見の三諦にして換言すれば法身久成の所見所具の三諦実相の一念三千である。（これを本因本果の三千という但しこれは名は本門なれども、義は迹門なりと御指南されてある）

而してこの九界（二乗）所具の三千を因として法身久遠の（本因本果の三千）三千を果として二乗（作仏迹因迹果の三千）の三千を取り合せて一念三千の法相を成立せしめてこれを記小、久成の一念三千なりと指南されてあり、これを迹因本果の一念三千なりと指南されてあります。この故に開目抄に

一念三千と申す法門は寿量品の文の底に祕して沈めたり。

と妙判されたのであります。

この文底の三千は一往は本因本果と称すといえども義は迹門実相にして、爾前迹門の十界の因果を打破て顕わした

真実本門の本因本果の一念三千ではないのであります。以上の如き一念三千は天台外宜の三千にして天台内鑒の一念三千ではない、この故に開目抄に、

竜樹天親知て而も弘め給わず、但我が天台智者のみこれを懐けり。

と仰せられて、此の上に天台内鑒同致の真実の本因本果の本門の事具一念三千を顕わして即ち爾前迹門の十界を打破して本門の十界の因果を説き顕す是れ本因本果の法門なるべしと判じて本門の本因本果の事具一念三千を顕わされたのであります。

八　一念三千の能所総別について

一念三千の教理は爾前諸経に全くこれなく、法華経に至つて始めて説き示された所であります。而して爾前諸経に一念三千の教理が説き示されていないという事は、諸法について言えば、十界互具を説かず、実相の理についていえば開会を明さないからであります。

実教たる法華経に至つて諸法については十界互具を説き、実相に於ては三諦円融の円理を説き開権顕実の円理を顕わして二乗作仏を迹門に説き示し、本門には久遠実成を顕説されたのでこれによつて一念三千の法門即ち教理が顕れ示されるのである。この故に開目抄に一念三千の法門は十界互具より始まると仰せられたのであります。

而して一念三千の法門教理は、二乗作仏、久遠実成の二ケの大事によつて顕れる法門教理であることを開目抄（縮七五一）に示して

但し此経に二箇の大事あり倶舎宗成実宗律宗法相宗三論宗等は名をもしらず。華厳宗ト真言宗との二宗は偷（ひそか）に盗で

自宗の骨目せり。一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。竜樹天親知てしかもいまだひろいいださ（拾出）ず但我が天台智者のみこれをいだけ（懐）り。一念三千は十界互具よりことはじまれり。

と仰せになつてある。

二箇の大事である二乗作仏について十界を造りて、二乗の九界と作仏の仏界と互具せしめて、二乗の九界を因と為し作仏の仏界を果と為して一念三千十界互具を顕すこれを記小の一念三千と為すのである。これは迹門に顕説せられた所の二乗作仏即ち記小の三千である。本門に至つて六句実相に約して、久遠実成を顕しこの久遠実成の仏界と二乗作仏の記小の九界を取り合せて、二乗作仏を九界の因と為し、久遠実成の仏界を果と為して、記小の九界の因と、久成の仏界の果を互具せしめて十界互具一念三千を顕す、これ記小久成合論の一念三千である。この上に本門の久成の仏界を果と為し、我本行の菩薩の九界を因と為して、本因の九界と本果の仏界と互具して、十界互具の一念三千の法門教理を顕わす、これは本因本果の事具の一念三千で、而して記小久成合論本因本果の一念三千が、二ケの大事たる二乗作仏と久遠実成によりて顕されたのであります。即ち前者の記小の三千は二乗作仏によつて顕わされ、合論の三千は二乗作仏、久遠実成によつて顕され、本因本果の三千は久遠実成によつて顕されたのであります。

以上の三種の一念三千について、理具、事具を分別すれば、記小と合論の三千は共に諸法実相の円理によつて顕された二乗作仏、久遠実成であるから、理具三千であり、本因本果の三千は、本門（本地本門）久成の報身本仏の久遠実成について顕わす処の本因本果の三千であるから事具三千であります。

御指南に、（隆全九　六八）開目抄をひきて、

開目抄に、記小（九界）久成（仏界）を以て、十界互具を造つて、三千を成ず、迹門の方便品には三千これを明す

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

と雖も未だ廃迹顕本せざれば久成の仏界報身父大王も顕れず、記小の三千も定まらず、本門に至って本因本果の仏界の報仏を顕す。本因所具の九界と本果の仏界と十界互具して界如三千なりと判じ玉へり。開目抄に始めに、記小を釈し、次に久成を釈し、終りに答えて云く、然我実成仏已来無量乃至那由陀劫云云といふより、百界千如一念三千なるべしという迄なり。

而して御指南に開目抄の始めに記小を釈し、次に久成を釈しとある開目抄の御文は

此に予愚見を以て前四十余年の文と、後八年の相違を考えてみるに、その相違多しと雖も、世間の学者も許し、我身にもさもやとうち覚ゆることは二乗作仏久遠実成なるべし。法華経の原文を拝見するに舎利弗は華光如来以下、二には、教主釈尊は住劫第九の減人寿百歳の時以下略、まさしくこの疑を答えて云く、然善男子我実成仏已来○○○○那由陀劫云云　（縮七五四～七六四頁）

とあり。この下に華厳乃至般若大日経等は二乗作仏を隠すのみならず云云とあり即ち

華厳乃至般若大日経等は二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を説きかくさせ給へり此等の経々に二つの失あり、一つには存二行布一故仍未レ開レ権ヲ迹門ノ一念三千をかくせり。二つには言二始成一故曾ニテ未レ廃レ迹ヲ本門久遠をかくせり。此等の二つの大法は（事理三千）一代の綱骨一切経の心髄なり。迹門方便品は一念三千二乗作仏を説いて爾前二種の失一つを脱れたり。しかりと雖いまだ廃迹顕本せざればまことの一念三千も顕われず二乗作仏も定らず、水中の月を見るが如し、根なし草の波上に浮ぶるに似たり、本門に至つて始成正覚をやぶれば四教の果を破ぶる。四教の果を破れば四教の因破れぬ、爾前迹門の十界の因果を打破って本門の十界の因果をとき顕す、此れ即ち本因本果の法門也、九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備りて、真の十界互具百界千如一念三千なるべし。と仰せ

（縮七六五）

られた御文をひきて、迹門実相二乗作仏の記小の一念三千は、記小久成合論の三千になり、この合論の三千は廃迹顕本せられて本因本果の事具三千を顕わし、茲に本門事具本因本果の三千が極まるのであると指南されたのであります。

以上開目抄の御文を引て述べた一念三千については前述の如く当宗にては教理としているに対し諸門流にては一念三千を宗旨と謂つている、ここに大きな謬解があるのであり、宗旨はあくまで三大祕法であります。これを間違える故に宗祖の御題目を唱へながら、他派に於ては宗祖に違背して天台ずり、中古天台ずりに堕してしまうのであります。

南無妙法蓮華経は一念三千を総持する要法なることを示して四信五品抄（縮一五四二）に

問ㇾ汝何不ㇾ勧㆓進一念三千ノ観門㆒唯令ㇾ唱㆓題目許㆒。答云日本ノ二字ニ摂㆓尽シテ六十六国之人畜財㆒一モ不ㇾ残サ。月氏ノ両字ニ豈無㆓七十箇国㆒。妙楽云略ク挙ニ経題㆒玄ニ収ム一部㆒。又云略ク挙ニ界如㆒具サニス三千㆒。文殊師利菩薩、阿難尊者三会八年之間ノ仏語挙レ之ヲ題㆓妙法蓮華経㆒次下ニ領解メ云ク如是我聞ト云云。

と仰せられています。

これに対して門祖日隆聖人御科文遊ばされ、

南無妙法蓮華経は界如一念三千を惣持する故に、惣名の要法を以て一代最勝の要法と為す

と仰せられているのであります。

観心たる一念三千を教相にあらわされたのが二乗作仏、久遠成道であり、十章抄（縮六七五）に

一念三千の出処は略開三の十如実相なれども義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限るべし。と仰せられている真実の依文判義とは種脱をもって判ずることで、この二

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

乗作仏をこの文によって見るに、この二乗作仏に迹門の二乗作仏と本門の二乗作仏あり、本門の二乗作仏には脱と種の二つがあるのであります。即ち脱は今世に出て六句実相を聞き開悟し得脱する。これ迹中の脱であり、本因果国の実相を開悟して作仏するのは本脱でこれを記小となし、而してこれらの脱の機は何れも在世横取りの脱果にして種を以てあらはす本地下種の二乗作仏は、下種は本門八品に在り八品の中にも一品二半にあり、この久遠下種は末法の為に説き顕はされるのであります。

一般論としては、迹門には二乗作仏を説いて九界の成仏を顕し、本門には久遠実成を説て仏界の成仏を顕すとし、その仏界の自行成満の因果にまで謂を及ぼさないのであります。当宗に於ては門祖日隆聖人の御指南により、仏界の因行を明して成仏の根本、仏種子を顕本するに在り、これを御指南に総名顕本、本因妙顕本又下種顕本と仰せられています。このことを知らざる諸門流は「仏性論」の開顕を二乗作仏と説き、久遠成道を「仏陀論」という分別を以て各々に相関するものとして本迹一致論を説くのは開目抄の御妙判に違背するものであります。

次に前述の御指南の文に、

次に久成を釈し、終りに答えて云く、然我実成仏已来無量乃至那由陀劫云云といふより、百界千如一念三千なるべしと。

仰せられているこの中に御開山は記小久成の合論の三千を成ずと御指南あり、その所以は、「発迹顕本せざれば二乗作仏も定まらず」と仰せられているから、これを以て記小久成合論の三千を成ずると御指南あるのであります。

発迹顕本によって顕はす三千は、方便品の十如実相の文によって二乗作仏す、即ち記小と、寿量品の六句実相によって久遠成道す、即ち久成と、この二つを合論して三千を成ずるのは迹脱であり、この迹脱を以て記小とするのは本

地の立場であり、父大王が即ち本地報身本仏が顕れずんば記小も定まらず、この記小とは六句の実相を開悟して作仏するを記小とする故であります。故に本地報身本仏の久成を開顕して本因本果の三千を顕すのが開目抄の一念三千の真意であります。

そして開目抄の「此に予愚見を以云云」の文より以前は迹化御所知、天台の二箇の大事であり、「此に予愚見を以云云」より以後は本地本門の二乗作仏、久遠成道で高祖即ち本化御所知の二箇の大事であります。

而らば体内所摂理具一念三千とは何かと言うと観心本尊抄には、始めに天台止観の理具三千を出し、御科文によれば体内理具三千を出されある。この体内理具一念三千の法相は前述の如く当家は本因本果不二の理を根本として十界十如、三世間、三諦の四種法相を以て三千の法相を成立するのであります。台家の理具三千（当家より言へば体外）は前述の如く、十界、十如、三世間、三諦の理の四種法相を以て三千法相を成立するのであるが、台家は三諦円理を根本として論ずるものである故に十界死法門、三諦活法門といっているが、当家は十界の本因本果不二の理を根本として立つる三千なるが故に当家と台家の一念三千は其の名目は同じであっても本質、実体に於ては天地の異がある。彼は三諦円融の理を以て十界の諸法を論じ十如、三世間を説くもので所謂理体理用の三千であり、当家は十界の本因本果不二の理を以て十界諸法の本理と為して、十界、十如、三世間の諸法を説き三諦円理は十界の事体に備はる理用とする故にこれは事体理用の三千である。

これ要するに台家は三諦の理に約して円具を説き三千の互具を説く、当家は本因果不二の理に約して円具を説き十界三千の互具を説く、而して当家の互具とは依報、正報互具して十界の正報も依報も一界に十界を具し、十界も一界に摂備して無凝なのであります。

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

これ体内理具三千であります。この体内理具三千を以て㈠　木画本尊の原理、㈡　木画本尊の開眼、㈢　草木成仏の正体とすることをあらわされ、この原理正体を指して「難信難解」といわれている。

故にこの難信難解とは総じては総名妙法蓮華経、別しては体内理具一念三千であり、観心門の難信難解はこの体内理具一念三千教相門の難信難解は久遠成道なのであります。

この難信難解について内鑒天台の三大部には教相門と観心門の難信難解が明されてあり、先づ教相門の難信難解は玄義、文句に説く処であり、爾前諸経には二乗の永不成仏、闡提不成仏と教主釈尊の始成正覚である。法華経に於て二説を破して迹門には二乗闡提が作仏し、本門には釈尊の久遠成道を顕わされたことで、これは体内理具一念三千を二乗が証り、闡提不信者が体内理具三千の法門を聞く故で始成を破して久遠成道を顕わされたのは体内理具一念三千を教主釈尊が我が身に顕わして、その本因を我本行菩薩道と示し、本果を我実成仏已来甚大久遠と示して此の本因と本果互具し本因九界と本果仏界と不二して体内理具一念三千が現われるこれが久遠成道であります。かくの如く示された其の事実は教主釈尊一仏の説として一仏の二言でありその相異は相ひ容れない水火であり誰人も信じ難きものであり本地本門法華経に説れた二乗闡提作仏と久遠成道とは実に教相門の難信難解である。

この教相門の難信難解である二乗闡提作仏と久遠成道は本地本門法華経に説き体内理具一念三千を顕わす処のものにして、この教相門の難信難解が草木成仏を顕わすものであるからこれは仏界釈尊の久遠成道、二乗界闡提の作仏でなく草木非情界の二乗闡提作仏、久遠成道でその理由は本地本門法華経は一法界の上に十界を分別し十界互具を説きて依報、正報に亘て十界互具百界千如ありて法界の三千の法相を顕はしたものである故に言う処の二乗界は単一の二乗界でなく十界互具百界千如三千法相の二乗界であり仏界であります。

故に有情の上だけで百界千如三千を立てたものが玄文の三千の法相であり、有情非情に亘り、即ち正報依報の上に十界互具百界千如三千の法相を立たものが止観の一念三千であり、体内理具の一念三千は本因本果、此の本因本果の九界、仏界は非情と有情の上に顕われた処の本因本果十界であり、其の本因本果の十界互具の本因九界と本果仏界と不二するが故に正報の上に顕わされた二乗闡提作仏、久遠成道を法華経に説れたのであり、其の二乗闡提作仏、久遠成道はそのまま非情草木界の二乗闡提作仏、久遠成道の顕現で、況や依報、正報互具し本因本果の十界互具するが故に仏界の久遠成道は即人界乃至地獄界の久遠成道であり、二乗闡提作仏であります。

故に大意抄に妙判され　（縮一九六）

法華経之意は即兜率十方仏土中。即西方十方仏土中。人天に即して十方仏土中云云。法華経は悪人は悪人に対しては十界の悪を説は悪人五眼を具なんどすれば悪人のきわまりを救。女人に即して十界を談れば十界皆女人なる事を談ず

と仰せられてある故に二乗闡提作仏、久遠成道は本因本果の十界互具依報正報不二して互具する体内理具三千の上に顕現したもので、それ故に二乗闡提作仏、久遠成道は草木成仏に即する故に草木界の二乗闡提作仏、久遠成道である。

次で天台の内観止観に示された観心門の難信難解とは（本尊抄の冒頭の止観の文要に示された止観第五の観不思議境の理境に説れた一念三千、是れ即ち総名所摂の理具一念三千）即ち体内理具一念三千、百界千如（三世間）一念三千であり、是は非情の上の色心の二法で其の色心二法を表すものは十如是にして、これ即ち観心門の難信難解である。

即ち内鑒止観に於て体内理具一念三千を明された、それが観心門の難信難解であり、草木成仏の意神（原理）である。その体内理具一念三千は色心一体の法界に存在する十法界であり、換言すれば色心一体の法界の法相が十界であ

る故に一法界の法相即ち十界であるから同時に十法界は一法界であり、茲に十界互具する。それが法界の法相である。されば十界は互具して百界となり百界互具すれば千界となる、斯くして無尽に互具するものこれ亦法界の法相である。是の故に且らく三千の数を立て法界の法相を顕わす。此の十界三千の法相は色心の二法の上に而立する故に色心二法を表すものであり、十如是は十界の相性体を顕すものであり、法界の相性体を顕わす。委しく言えば法界の相性体力作因縁果報及び本末究竟等を示すものであり、この故に十界の中の一法界には必ず十如を具し、十界互具する百界には千如是があって三千法相を顕わしている。而して法界は心法の正報と色法の依報と互具し一体なるが故に十界の中の一法界には必ず依報の国土、正報の衆生世間を具しその原質と見る可き五陰を具するのであります。故に十界の中の一界には必ず三世間を互具す、十界には三十種の世間を互具す、百界には三千種の世間を具して斯くして無尽の法界には無尽の三世間を具する。是れを三千の満数を以て法界の法相を顕わす。この三世間にも亦色心の二法を具す。即ち国土世間は依報の色法、衆生世間は正法の心法であり、五陰世間も亦色心の二法あり、この故に一心、一物皆悉く色心二法を具するのである。是の如き色心の二法を顕したものは法界の十妙是が即ちこれである。

是の如き体内理具一念三千が草木成仏の意神となり、木画本尊開眼の意神となるこれが観心門の難信難解である。

以上によって体内理具一念三千を教相門及び観心門の面より述べたが更に一念三千観心の正体を明すと、

一念三千の観心の正体は台家の如く十界十如三世間の三千を三諦の理に約して成立するのでなく、開目抄に「一念三千と申す法門は十界互具より事起れり」と妙判ありて、当家は本因果互具の十界を以て一念三千の実体とせられた故に本因本果本国土依正互具を以て十如、三世間、三諦の理は其の用として具備せられたものとして本因果の十界互具を以て直ちに一念三千とせられた故に体内理具三千とは本因果互具の十界の因果を不二の理に約し、本因果十界互

具の九界所具の仏界に約して本因果互具の十界を顕わすを以て体内理具三千の観心となすのである。

而して本尊抄に「観心とは我が己心を観じて十法界を見る」と妙判されてある故に、この観心をあらわす修観たる観行は我等名字即の凡夫が唱題する処に具する故に本尊南無妙法蓮華経を観心の境となし口唱の題目を以て智となし本尊の境と唱題信心の智と境智冥合して観心を成ずる義もあるが、観心とは自力の観解ではなくして、法華経に依て観ぜしめられ信ぜしめられる経力による観心にして、我等名字即の凡夫の信心口唱する処に本因果互具一念三千の観心の正体を顕わせることを当体義抄（縮九九一）に

正直ニ捨ニテ方便一ヲ但信ニシ法華経一ヲ唱ニフル南無妙法蓮華経一ト人ハ煩悩業苦ノ三道法身般若解脱ノ三徳ト転ズレバ三観三諦即一心ニ顕レ其人ノ所住之処ハ常寂光土也。能居所居身土色心倶体倶用無作三身ノ本門寿量ノ当体蓮華仏トハ者日蓮カ弟子檀那等ノ中ノ事也。是即法華ノ当体自在神力ノ所レ顕ス功能ナリ敢テ不レ可レ疑フレ之ヲ不レ可レ疑フレ之ヲ敢

と妙判せられてある。

されば名字即の凡夫が唱題する処に久遠本地の寿量品の顕本の本仏（即ち本因果互具の仏界）が顕現せられるのでこれは本地本門法華経の当体たる本門八品上行付属の南無妙法蓮華経の自在神力即ち経力の顕す功能にして経力による観心である。

而して我々名字即の凡人信心の一念に本因果互具の十界を具現してあるけれども末代悪世の初心の信者は自力にて十界互具の仏界が信心唱題の一念に具現する仏界の相を知ること出来ないのは、喩えば他人に具しある六根は我自身は明に見知れども、自身に具備する六根を自力で見知ること出来ない、それと同じく我が己心に具顕しておる仏界（十界互具）を見知ることできないが、明鏡に向えば自身に具備しておる六根は明に見知ることできるのであり、そ

れと同じく外縁の経を明鏡として我等凡夫の己心を写すとき自身に仏界を具備すること見知るのであるが、設い爾前の経々惣じて迹中の諸経に付て十界互具の仏界を見知らんとしても真実の仏界を見ること出来ない。迹中の諸経の処々の経文に六道四聖を説き載られてあるけれどもその十界は真実の十界互具の十界でない。本地本門法華経並に天台大師内鑒の止観の明鏡に向い、この明鏡に任せて自身を写す時、自身の凡夫の己心に（教信の己心）自具の十界百界千如一念三千即ち本因果十界互具の仏界を具すること経力によって知ることができるのであります。

以上によって体内理具一念三千について明されたのであり、即ち理具一念三千とは妙法蓮華経体内の本因本果不二する十界互具の理を言うのであり、この理が草木成仏、木絵本尊の開眼及びその意神となるのであり、その観心の正体は名字即の凡人が妙法五字を口唱するその経力信心の己心に十界三千を具することを明し、十界互具の界々を顕現する相を明し経力によって己心に十界を互具することを信知せしめられ経力によって十界を顕現することなのであります。この体内理具の一念三千は体内事具一念三千に摂められこの体内事具三千は惣名事具三千に摂められるのであります。

即ち体内事具一念三千とは総名体内の本因本果而二する十界互具をいうのであり、惣名事具三千とは、これに惣別の二義があるのであります。即ち惣とは南無妙法蓮華経を直ちに指して事具一念三千とするものであり、別とは惣名体内の本因本果而二する十界互具の理を指すのであります。

而して惣名事具三千の惣別について惣名が直ちに一念三千十界互具を顕現したる相なりとすれば南無妙法蓮華経が事具一念三千であるという義であり、一念三千が南無妙法蓮華経であるという義が成立するが、これは名体に約してかくいうのであり、惣名が直ちに一念三千であるという場合は名に約し、一念三千が妙法蓮華経とする場合を体に約

されてありますが、この様に一念三千と南無妙法蓮華経と名体を論ずる南無妙法蓮華経を御指南には、別体の南無妙法蓮華経となし、体内理事の一念三千惣名事具一念三千を総在する南無妙法蓮華経は総体総在の南無妙法蓮華経であり、総体の南無妙法蓮華経は能生能開能摂の妙法蓮華経であり、別体の南無妙法蓮華経は南無妙法蓮華経を直ちに事具三千とするもので、前者は惣体惣在の南無妙法蓮華経であり、後者の南無妙法蓮華経を以て事具三千とするのは四句を惣する別要の南無妙法蓮華経なのであります。

体内理具一念三千は惣名事具三千妙法蓮華経に摂せられることによってその理が極成し、体内事具一念三千も惣名事具三千妙法蓮華経の中に摂せられなければその理は極成せず、妙法蓮華経の中に入らねば不二、而二の一念三千とはならないのであります。

この体内理事の三千を総摂する処の惣名事具三千の南無妙法蓮華経、即ち四句を総ずる別要の南無妙法蓮華経一念三千即南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経即三千とする名体一如の妙法蓮華経とは如何なるものかと申ますと、この惣名事具三千妙法蓮華経は本地本門境妙にして、その法体には本因本果不二而二する十界互具百界千如一念三千を具備しているのであり、理具三千を摂めています。

その法体を示せば本尊抄（縮九三八）に

法華経ニ云ク欲レ聞ニ具足道ヲ一等云云　涅槃経ニ云ク薩トハ者名ニ具足ニ一等云云　竜樹菩薩ノ云ク薩トハ者六也等云云。　無依無得大乗四論玄義記ニ云ク沙トハ者訳メ云フレ六ト　胡ノ法ニハ以テ六ヲ為ス具足ノ義ト也。吉蔵ノ疏ニ云ク沙トハ者飜ノ為ス具足ト。天台大師ノ云ク薩トハ者梵語ナリ此ニハ飜スト妙等云云。

と仰せられてあり、

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

惣名事具三千を梵語には薩達摩芬荼梨伽素陀羅といひ、飜じて妙法蓮華経といいこれを法華経に説て欲聞具足道と説れてあり、涅槃経には薩とは具足に名付た語といい、竜樹菩薩は薩とは六なりといい、無依無得大乗四論玄義記には沙とは訳して六といい、胡の法には六を以て具足の義となすとあり、吉蔵の疏には飜じて具足となすとあり、天台大師は薩とは梵語これには妙と飜ずといわれてあり、これが惣名事具三千の法体にして、欲聞具足道の経文とは、今惣名事具三千妙法蓮華経の扶釈として引用されたのであるから、具足道の具足とは十界互具本因果不二の惣名事具三千妙法蓮華経を指すのであります。

この本地本門境妙たる惣名事具三千妙法蓮華経に理具三千を摂めてあることを明し、名字凡人の信心に釈尊の迹本の自行の因果を兼摂してあり、このことを本尊抄（縮九三八）に

私加会通如レ顯本文。雖レ爾文心者釈尊因行果徳二法妙法蓮華経五字具足。我等受持此五字自然譲与彼因果功徳。

と仰せられ、釈尊の迹本二門に示された自行因果の功徳は妙法蓮華経の五字に具足してある故に我等凡夫名字即の信心によって五字を聞受信持すれば、かの釈尊の迹本二門に示された仏自行の因果の功徳を譲り与え玉うと名字即の信心に釈尊の自行の因果の功徳を具備すること示され、更に惣名に兼摂する処の迹門の因果とは、又本尊抄（縮九三八）に

四大声聞領解云無上宝珠不求自得云云。……須臾聞之即得究竟阿耨多羅三藐三菩提是也。

と仰せられ、その迹門の因果とは二乗作仏の因果であり、体外の場合は迹門十如実相によるのであり、今は体内理具三千なる故、本因果不二、（本地実相）の理によるのであり、此の本因果不二の二乗作仏の因果即ち迹門（本中之迹）の因果は、本門の三五塵点の中には三千塵点下種の惣名妙法蓮華経に帰摂するのであり、今の惣名とは三千塵点の妙

法蓮華経であり、この三千塵点の惣名妙法蓮華経は境智の中では境妙にして、三千塵点の上に更に五百塵点が顕われる時、本地本門五百塵点の境智の中には、本地本門五百塵点の境妙に摂せられ、三千塵点の惣名妙法蓮華経は本門五百塵点に於て究極するのであります。

次に本門の因果とは本地本門の妙境南無妙法蓮華経惣名事具三千に摂められた師弟の因果にして、前者の迹門の師弟の因果を摂めた惣名は三千塵点下種の妙法蓮華経なる故半分の妙法蓮華経なるも今の本門の師弟の因果を摂めた妙法蓮華経は五百塵点の妙法蓮華経なる故全分の妙法蓮華経であります。この本門の師弟の因果を挙げて惣名に摂して理具三千の実体を成ぜられたことを本尊抄（縮九三九）に

寿量品ニ云ク然我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等云云……上行無辺行浄行安立行等ハ我等カ己心ノ菩薩也。

と仰せられ、寿量品に本門久遠の仏界を示して、然我実成仏已来百千万億那由陀劫なり等と説れたのは本門の教主釈尊の証果で久遠の仏界は十界互具する故に我等の己心（信心の己心）に具足せる処の釈尊であり、五百塵点の劫数に依て顕された所顕の三身（報身）にして無始無終に常住の仏であり又久遠の仏界の因行を示して、我本行菩薩道所成寿命今猶未尽復倍上数と説れた本門の教主釈尊の因行の菩薩界は十界因果互具する故に末法の我等の己心に具する処の釈尊の眷属たる世界であります。故に地涌千界の菩薩等は我等の己心に具する処の釈尊の眷属で、倒せば彼の太公望周公旦は武王の臣下であって同時に武王の子幼稚なる成王の臣下眷属であり、彼の武内大臣は神功皇后の棟梁であって同時に仁徳王子の臣下眷属であるが如きである。上行、無辺行、浄行、安立行等の大菩薩は我等が如き幼稚（初心）の者の己心に具する処の菩薩界であると十界互具一念三千体内理具三千の実体を示されたのであります。

このことを本尊抄（縮九三九）に妙楽大師の弘決の文を引て、即ち

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

妙楽大師云、当レ知身土一念三千。故成道時称二此本理一一身一念遍二於法界一等云云

と仰せられて止観の五に明す体内理具三千の法理を妙楽大師は解して当に知ることが出来る。一切の諸法は十界であり、それは正報の有情身と依報の非精の土とである。此の依報の十界と正報の十界が互具して百界となり、それに十如是の因果が備って百界は千如是となりそれに三世間が備えて百界千如三千世間となる故に十界の身土（正法・依報）は三千世間であってそれが諸法の真実の相であり、此の三千の諸法は我等の己心の刹那の一念に具備している故に身土は一念三千であります。かくの如くである故に因行が成就し果満じて成道を成ずる時此の本理（本因果不二の理）に称って我等末法の凡夫の色心の一身、我等凡夫の己心の一念の心法即ち一身一念は十法界（依報・正報の十界）に遍満して我が色心と十法界の色心と一体になるこれが体内理具一念三千でありますと法身理成仏を明され、本地の妙境たる南無妙法蓮華経（惣名事具三千妙法蓮華経）は依報非情の土と正報有情の身と此の身土の十界が互具して本因本果の十界が互具し不二する理具三千を能摂することを明され、この妙境の南無妙法蓮華経を受持して成道する時我等が唱題する一念と三千法界（十界）と因果不二して一体となるが法身理成仏であります。かくしてあらわされた妙境惣名事具三千の南無妙法蓮華経は境智惣在の能摂南無妙法蓮華経の所摂となるのであります。弘決の五の文は総じて巻頭の止の五の文要、体内理具一念三千を結釈し、体内理具三千の実体（妙境の惣名）惣名事具三千を結び、この体内理具三千の実体妙境の惣名たる惣名事具三千は後の能摂総在総名南無妙法蓮華経の所摂となることを示されたのであります。

即ち体内理事の三千を極成せる能摂惣名事具三千は能摂総持総在総名南無妙法蓮華経に能摂せられ、この総名事具三千を摂めた総持総在総名南無妙法蓮華経の出処は本地の五時の中には本地本門八品にあり、その体内の総名事具三

千には大智門本果妙三千と大悲門本因妙三千の二義があり、この本果妙事具三千を本因妙事具三千に摂めて総持総在総名妙法蓮華経に摂められるのであり、一往は本地別体門たる一品二半にあり、再往は本地本門八品惣体門の体内に取り入れられるのであります。

この本地惣名南無妙法蓮華経の体内にある惣名事具三千には本果妙事具三千と本因妙事具三千があり、先づ妙境即ち久遠の理の辺をとり、本地別体門たる一品二半の正宗の意に約して本地本門妙境の理具一念三千によってあらわされた処の本果妙事具三千を明すと、

この本果妙の事具三千は本地別体門にたる一品二半正宗の意に約して顕わされた本地本門妙境の理具一念三千にして、本尊抄（縮九三九）に一念三千の法体を明された妙判に

今本時ノ娑婆世界離レ三界ニ出ヲ四劫ヲ常住ノ浄土ナリ。仏既ニ過去ニモ不レ滅セ未来ニモ不レ生セ。所花以テ同体ナリ。此レ即己心ノ三千具足三種ノ世間也。

と仰せられています。

この御文に門祖日隆聖人御科文遊ばされ、

正しく本門依正久遠の一念三千の躰を顕わす。

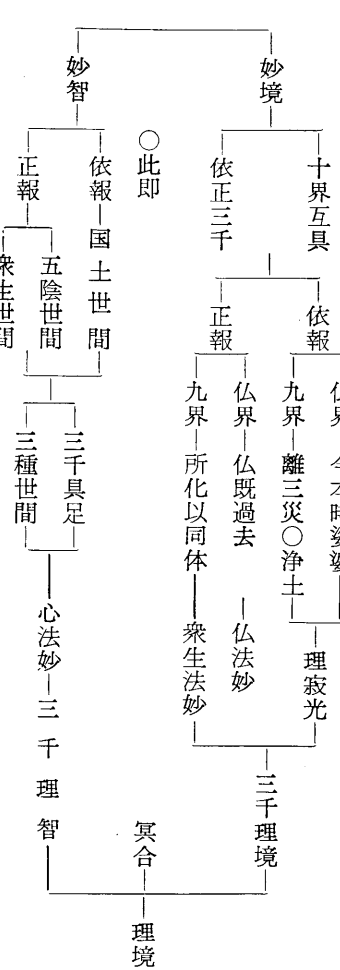
と仰せられ、この段分れて、更に

本門一品二半の正宗の意に約して理具一念三千を顕わす。

と仰せられています。これを図解すると、

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

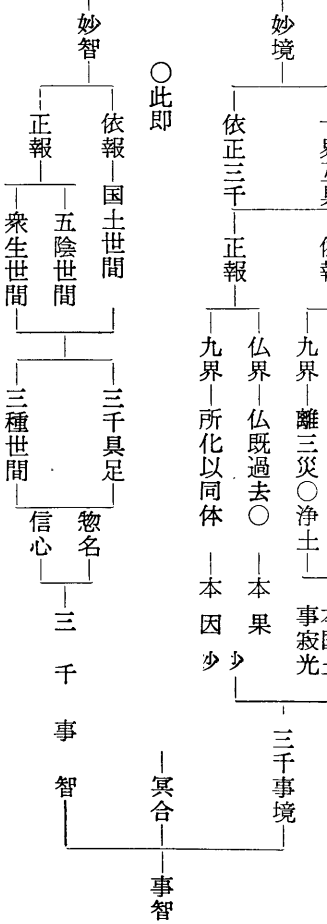
本地本門久遠理具一念三千



これによって、本地別体門たる一品二半正宗の意に約して明された本地本門妙境の理具一念三千は、一往法身久遠の本仏所証の果上の妙境理具三千を顕わすが　再往は本地報身本仏の所証所顕の本地本因果不二（本地別体門の実相）の久遠の理具三千を顕はすものにして、この意によれば即ち本地別体門一品二半正宗の意によって顕わされた十界依正の法相は、その依報たる本国土、本地娑婆世界は久遠報身本仏が妙智を以て照し顕わされた依報の国土なる故に三災四劫を出離した本地浄土であり、その正報の仏界は常住不滅であり、九界も同体、常住不滅不変の同体互具の十界である。本果の仏界、本因の九界同体互具する十界不変常住の法相を顕わして己心に観ずる故に久遠の理具三千を顕わすのであり、ここに本因本果不二の不変常住の理が顕われ、この三千法理が十方界に遍満する故に我等の経力信心の己心に不変常住の理具三千を具することとなり久遠の理具三千があわれるのでありこの理具三千は本果妙事具三千

に摂められるのであります。

本地本門久遠事具一念三千



次に妙智の事具三千本因妙事具三千とは、本地別体門の一品二半を本地本門八品の体内に取り入れ（能摂して）、本地本門八品体内の本地久遠一品二半の正宗として、妙智の事具三千をあらわすのであります。この意によれば一念三千の法体を顕わす処の所謂四十五字の法体の妙判は、能証の行智を顕わす久遠の妙智事具三千を顕わし、能証能顕の仏の妙智事具三千を顕わす義となり、久遠の十界の依報、正報の法相は久遠報身本仏仏界釈尊の証智と九界上行菩薩の修智と常修常証して報われたる本地本国土娑婆であり、故に三災四劫を出離しながら娑婆即事寂光の浄土であり、その正報の仏界は常修して常証を顕わす仏界であるが故に生死無常の中にありながら而も三災四劫を出たる仏界九界同体の仏界であり、九界の上行菩薩もその所化として常証して常修を顕わす九界である故にこれ亦生死無常の中にありて而も生死常住を顕わす随縁常住の久遠の九界の菩薩であります。此の如く随縁久遠の仏界九界本因本果而二して

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

事具三千を顕わす、これが即ち本地久遠の事具三千、妙智の三千であります。この本地の妙境たる久遠の理具三千によってあらわされた本果妙事具三千と、本地の妙智たる久遠の事具三千によってあらわされた本因妙事具三千が（惣在が横の場合）境智冥合して、即ち本果妙事具三千は本因妙事具三千に能摂せられて、この本因妙事具三千（惣名事具三千）を惣名妙法蓮華経の体内に摂めて末代下種の一切衆生に授与せられたのであります。

このことを御指南に、（隆全九、六八―九）

本尊抄には始めと中とは、止の五の夫一心具三十法界等の文と、弘の五の当知身土一念三千の文を引きその一念三千の義をば本因本果の経文を引きて事の三千を釈する也、これは本因本果の所覚の法を以て事の三千妙法を成ずる也、その次下に事の三千を以て、妙法五字に裹む時、先づ三千の実体を釈して云く、今本時の娑婆世界是れ即ち己心の三千具足三種世間也

と御指南あり、御指南の当抄本尊抄の御文は巻頭に止の五の文を撰出ありて、次に弘の五の文を引き、この本疏と末疏の両文の間に、本因本果の経文をひきて、本因本果の事具三千を釈されたのであります。

その御指南の文を本尊抄に求めたならば、

問云法華経何文天台釈如何。答曰法華経第一方便品云欲令衆生開仏知見等云云是九界所具仏界也。寿量品云如是我成仏已来甚大久遠寿命無量阿僧祇劫常住不滅。諸善男子我本行菩薩道所成寿命今猶未尽復倍上数等云云此経文仏界所具九界也。

とあり。当文以下の御本文は本因本果の事具三千の義を釈されたのであると御指南せられたのである。

更にこの事具三千を結びて弘の文に「当知身土一念三千○一身一念遍於法界」と結ばれたのであります。

而してその次下の文に、この本因本果の事の一念三千を以て、妙法五字に裏む時、先づ事具三千の実体を釈して云くと、御指南ありて本尊抄の事具三千の法体を明された、「今本時の娑婆世界等」の四十五字の事具三千の実体を明らかにして妙法蓮華経の五字に裏み摂めて、その次の御文に、（縮九四〇）

此本門ノ肝心ノ於ニ南無妙法蓮華経ノ五字ニ仏猶文殊薬王等ニモ不レ付ニ属ジタマハ之ヲ一何況ニ其已下ヲヤ乎。但召ニ地涌千界ヲ一説ニ八品ヲ一付ニ属ジタマフ之ヲ。

と妙判ありて、本因本果本国土三妙合論事の一念三千をば本門上行要付の惣在南無妙法蓮華経の本尊に裏み収めて上行に付属しその本尊を、本尊抄に「其本尊為躰」と但限八品の本尊を御指南されたのであります。

これによって但限八品の本尊はすでに本因果国三妙合論事の一念三千の妙法蓮華経を収め裏んでいるのでありまして、この御指南の意は、一品二半を正意とする諸門流の諸師が、本因果国三妙合論事具三千をば、本尊南無妙法蓮華経の法体であると論ずるのは惣別を無視するものと破して、本門の肝心たる上行要付の本尊は三妙合論事の三千を摂めてをり惣在してあることを御指南されたのであり、上行要付の本尊は能生能開能摂であり、事具三千は所生所開所摂であることを明らかに示されたものであります。このことを唱法華題目抄（縮三四一）に

其上法華経の肝心たる方便寿量の一念三千久遠実成の法門は妙法二字におさまれり。

と仰せられ、一念三千法門（縮二〇八）に

一念三千の観念も一心三観の観法も妙法蓮華経の五字に納れり。

と仰せられ又同抄（縮二〇九）に

一念三千一心三観等の観心計が法華経の肝心なるべくば。題目に十如是と置くべき処に。題目に妙法蓮華経と置れ

たる上は不レ及二子細一

と仰せられています。

九　総名妙法蓮華経と別体事具三千の同異について

次に総名妙法蓮華経と事具三千の同異について述べると

日行聖人の本尊抄講義に総名妙法蓮華経と一念三千の同異について、問答を設け、

問う、一念三千の珠を以て、妙法五字の袋の内に裏むとは、（三千を珠と云い、妙法を袋という、故に珠の三千は勝れ、袋の妙法はおとるというべきか）三千の珠はすぐれ、妙法の袋はおとるというべしや。

答う、爾るべからず、次に記するが如く、一念三千の体と、五字の名と妙体俱実の事の一念三千（故に）即妙法にして、優劣なきなり、故にこの珠は無償の宝珠の袋につつみて、珠と袋と同等にして、常恒にしてこの袋に珠を裏みて相離れざる処の大宝なり、大田抄（縮一七二二）云く

此一念三千の宝珠をば妙法五字の金剛不壊の袋に入れて末代貧窮の我等衆生の為に残し置かせ給ひし也。と云云

更に問う、本門の意、名体一如の故に三千と妙法とは、珠と袋と不同なしといわば、御文段の如く（不識一念三千……袋内裏二此珠一云云というべからず）本門の理具三千の珠を以て、本門の総名の五字の袋につつむといわば、これすでに本門の総名と本門の別体と勝劣あるが故なり。

答う、所難の如し、但し、この時は総名所摂の（本門理具の三千は）功徳の義なり。謂く、本門総名所摂の功徳は、広く、万法を摂するが故なり。故に本門の総名は勝れ、本門の理具三千は劣るが故に裏まずというべからず、す

でに理具三千を、事具三千に摂むるが故に本門の事具三千をも裏むというべし、而して、事具三千と、妙法五字とは名体一如の故に、妙即三千、三千即法にして、能摂の妙法と所摂の三千とは、一如なるのみ。

尋て云く、本門の三千と、本門の惣名と、勝劣なしという証拠如何。

答う、本門の妙法蓮華経は、名体倶実の故なり、倶、惣名と本門事具三千の不同は名体の意なり、

とあります。

これについて御指南に（隆全一、一二九）

諸御抄に同意の二辺是れあり、観心本尊抄に、「今本時娑婆乃至三種世間是也等」と判じて、（これは三妙合論事の一念三千）、この本門の肝心妙法蓮華経の五字等と書き玉う間、妙法蓮華経と、一念三千と同体なり、所詮本門十妙その証なり、日蓮大士は、本門の意にて名体一如の本因妙五重玄を成ずる故に、本門十妙体具の本因果国三千を観心本尊抄にひきうつす間、総名ケ家の三千なれば、妙法蓮華経と三千とは、同体なり。謂く、総名久遠なれば、三千も常住（久遠）なり、故に名体不二にして、妙法蓮華経と三千と同体なり。

又尋ねて云く、諸御抄に妙法蓮華経と一念三千と異なる辺これ在り、その相如何。

答う、妙法、三千は名体の異なり、（妙法とは行師の、妙即三千と云われた妙法であり、三千は本門の事具三千であります。）

仍て、天台内鑒本密、玄義一部は名は真なり、体は実なり、是れに仍て、玄義一に云く、此妙法蓮華経者本地甚深之奥蔵也と云えり、始めの妙法蓮華経とは名体なり、本地甚深とは宗也、是の如く名体一如なりと雖も、意密にあるを一念三千と名付け、この三千の中の仏界（一念三千）、本因妙名字即の口密に出づれば、妙法蓮華経なり、故

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

に、名の辺は名字即の位にあって下機を救くるなり、意密の三千は尚観行に在り、故にこの観行は曾谷抄の如く、但、信心の位の妙法蓮華経にあるを三千と名づくる故に、名字ケ家の観行即なり。この観行即の三千は、久遠下種の種子なりと雖も、開目抄の下巻の如く、末代我等一分の慧解もこれなき故に、観心抄の末に、妙法五字を以て一念三千を裏み、末代幼稚の衆生をたすく、（この三千をば名字即の三千に摂して即ち、大智門の三千をば大悲門の三千に摂めて妙法五字に裏む）等と示すが故に、十章抄（縮六七五）の如く「日本国在家の者には但一向南無妙法蓮華経と唱えさすべし。」

と御指南あり、以上の如く名体一如すれば、三千と妙法は同体であり、同体なりと雖も、名体の相違あり、即ち、口業南無妙法蓮華経と唱うれば、妙法蓮華経は惣名惣在であり、意業にこれを摂めて事具一念三千を信ずれば惣名はすぐれ、事具三千の体は劣るなり。

かくの如く妙法蓮華経と一念三千を名体に約して論ずる処の妙法蓮華経は、事具三千を妙法蓮華経となす処の別体の妙法蓮華経であります。

この故に次の御指南（隆全一、一三一）に

迹門より本門は下機を摂するなり。と易行の宗旨を定め玉う間、日蓮宗顕露教観（本地にして口業正意、妙法経力による観心）の一節は但教弥実位弥下の宗旨なる間、名体惣在の南無妙法蓮華経を貴賤これを唱う。（貴賤の二字は仏と凡夫也）是れ三世諸仏説法の儀式と定むるが本因妙名字即の上行口密の語言陀羅尼の信行也。

と御指南あり。この御指南により名体の同異を論ずる妙法蓮華経は、別体の妙法蓮華経であり、上行所伝の妙法蓮華経は名体を惣在する妙法蓮華経であることが明らかに拝されるのであります。別体の妙法蓮華経は、本門の事具三千

に名づけられた妙法蓮華経であり、惣体の妙法蓮華経は今の御指南の如く名体惣在の南無妙法蓮華経であります。

十　妙法は能裏、三千は所裏の関係について

本尊抄の結文に（縮九四九）

不レ識ニ一念三千一者ニハ仏起ニ大慈悲一。妙法五字袋内裏ニ此珠一令レ懸ニ末代幼稚ノ頸一。

と妙判し玉う故に、妙法蓮華経は能裏であり、事具三千は所裏であります。

所裏の事具三千とは前述の如く本因本果本国土事具三千妙法蓮華経の中に於て、本果妙の事具三千を本因妙の事具三千に摂めて、総在妙法蓮華経に裏みて末代幼稚の頸にかけさしめたまうたのであります。

天台外宜の一念三千は迹中迹門の十如実相によりて成立せられた迹門の理具三千であり、記小（方便品四仏知見の文）、及び記小久成合論の一念三千（寿量品の六句実相）であります。

天台内鑒の事具三千とは久成の本因果国三妙合論の事具三千であります。

この本因果国三妙合論の事具三千をば、開目抄（縮七六五）に

爾前迹門の十界の因果を打破って（迹中諸経の迹門実相の理具三千を破廃して）本門の十界の因果を説き顕す、是れ則ち本因本果の法門也。とあり本因本果の法門とは事具一念三千の教理であります。

故に九界も始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備って真の十界互具、百界千如一念三千なるべし。

と示された三妙合論の事具三千であります。かくの如く本地本門の本地の十界、即ち真の十界が互具する故に、本果妙の仏界に十界互具し、本因本果の正報と、本国土の依報と互具して三妙合論の事具三千があらわれるが、これは本

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

果妙の三妙合論の事具三千であり、本因妙九界にも十界互具して、本因本果の正報と本国土の依報互具し、三妙合論して本因妙の事具三千を顕わす。

前者の本果妙の三千は大智門の事具三千であり後者は大悲門の事具三千であります。かくの如く本果妙の事具三千本因妙の事具三千のあることが、開目抄の妙判に、

九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に具す

と判じ玉う処に本因妙の事具三千、本果妙の事具三千のあること示されてあります。

これは本因本果の法門であるが故に互に具備しなければならない故に御指南の如く本因妙三千と本果妙三千が成立するのであります。而して迹中迹門の理具三千は十界互具し、百界千如一念三千の法理を諸法実相三諦円融即ち十如三諦の理にこれを求め、本地本門の事具三千は本因本果の法理にこれを求め、今の開目抄の妙判のごとく本因本果の法門也と仰せられたのであります。

御指南に（隆全四、五一八）

本門十妙の中、始の三妙を以て、三千は所裏、妙法蓮華経は能裏の証拠を出し玉うなり。云く本因本果本国土の三妙は、事の一念三千にして所裏なり、十妙の妙法蓮華経は但是一の妙法蓮華経なり是れ能裏なり

と仰せられて本門の事具三千は本地本門の妙法蓮華経の妙の一字即ち総名に惣在せられた本門十妙の本因本果本国土三妙合論の事具三千であるから、事具三千は所裏であり、十妙を総在する総名妙法蓮華経は能裏であると能裏、所裏を証明せられたのであり、同時に三妙合論の三千は三妙を以て成立したものであると指南されたのであります。

されば開目抄の妙判の如く本因本果本国土三妙合論の三千は、実相三諦の理によって成立する迹門の十如三諦を破

廃して本因本果の法理によりて成立する本門の事具三千を顕わされたのであります。

而して本因本果の事具三千が、本門十妙の中三妙によって組立られ、その本門の十妙を惣在する妙法蓮華経であるから、妙法蓮華経はもとより能裏であり、事具三千は所裏であると指南された前出の

「謂く本因本果本国土は事の三千、所裏なり、十妙の妙の一字は但是れ一の妙法蓮華経也。」

とある文によりて結要付属の総要妙法蓮華経の体内に事具三千の妙法が惣在せられてあることが知られるのであります。御指南に十妙総在の妙法蓮華経と指南されてある。

故に御妙判にその義を示して、兄弟抄（縮二四二）

智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華経の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して、三国の一切衆生に普く与え給えり。

と仰せられてあるのは天台外宜の止観の理具三千にして、この迹門の理具三千の法理を迹門の妙法蓮華経の五字の蔵の中より取出して止観にこれを述べて三国の一切衆生に与えられたのであります。

而る故に本門の事具三千は本門の結要付属の総要、以要言之の総在南無妙法蓮華経の蔵の中（体内）より取出して開目抄に説き示して永異諸経の宝としてこれを示し、本尊抄の結文に別して本門事行の南無妙法蓮華経にこの事具三千を摂めて妙法五字に裏んで末代の一切衆生に授与せられたのであります。

開目抄に妙判せられた本因本果の法門たる事具一念三千は永異諸経として顕わされた久遠成道によって示された処の法門教理にして、久遠成道は本地久遠の本仏であり、この久遠本仏は事具一念三千を覚った能覚の仏であり事具一念三千は所覚の法であり、この能覚の久遠本仏については本果妙の本仏釈尊上行と本因妙本仏釈尊上行があり、而し

総名妙法蓮華経と一念三千の関係について

て上行菩薩に総要を付属された釈尊は本因妙の本仏釈尊にしてこのことは至る処に御指南されてあり、

下種の為には八品を説て本果を以て裏となし、本因妙を面となし、本果の釈尊を以て本因妙の上行と顕れ因果同体の本仏として本果の方をば師となし、本因妙の方をば弟子と顕し以要言之して上行に要法を付し（隆全四・五一五）

と示されてあります。

この能覚の釈尊に本果妙本仏　本因妙本仏があるごとくその所覚の法たる事具一念三千にも大智門の三千即ち本果妙事具三千と大悲門の三千本因妙事具三千の二つがあり、本果妙の三千を本因妙の三千に摂めこれを総名南無妙法蓮華経の要言の法に摂めて、本因妙本仏が本因妙上行に以要言之して末代下種の為に付属せられた故に事具三千は所裏にして総名妙法蓮華経は能裏なのであります。